

俳句

明月澄子

池野隆

夫と見る夕焼の空の色談義

(天爲湘南)

毛糸編む好きに時間をひとりじめ

身に入むや老にさからひ紅をひく

手を掛けし夕餉独りの夜長かな

うなる風ひたすら栗の皮をむく

飯野修身

石垣みち代

武石川たけしがわ面揺らめき夏ぞ行く

(はまへ)

遠き夏か杜か父魚か掴みし武石川

さわさわと古代の風音まごもぞう真菰まごもぞう叢

赤黄白夕べの宴おしろいばな白粉花

赤々と燃ゆる満天星秋の宵

永き日や猫に欠伸をうつさるる

(天爲湘南)

家中に妻の歎声燕来た

秋寒や寡黙を運ぶ朝のバス

梅雨晴間無色の朝を寿ぎて

夏蝶に声かけて撮るワンシヨット

モノクロの私屈んで蟻を見る

(波)

里山の無人スタンド目高売る

冬核延命地蔵の黒き艶

薄原風の余韻をたのしめり

竹皮を脱ぐやこの世も捨てがたし

石塚 佑伎子

一色 千穂子

麓まで紅葉紡ぎ薄暮かな

手ばなした愛追いかけて冬の街

光背に集めて老夫麦を踏む

富士の背に沈む夕日や秋動く

積る雪母の繰り言聴くような

井 尻 浩 彦

伊 藤 美也子

万緑の山なみ映し河蛇行

風薫る源氏蜂起の古郷とや

青葉林わらぶき書院を覆ひたる

太古より絶ゆることなきこの泉

湧く泉こころの咎も洗はるる

諸葛菜猫くぐり来る癖の穴

花ミモザ海風抜ける散歩道

無住寺は子らの遊び場梅真白

持ち寄りて直ぐの昼餉や女正月

江の島と富士の御座して初景色

(波)

(波)

春近し誰かが玉子温めてゐる

犬ふぐり何だかそつぽ向いてゐる

春立つや好きと言はれてはにほへと

天辺は風にまかせて立葵

紅葉してやはらかき夜もなりにけり

今井 美恵子

(波)

橋の名は思ひ出せねど猫柳
二行ほどの旅の便りや夜の秋
思ひがけぬ小径に出たり螢草
龍の玉弾ます遊びさびしけれ
氏神に上社下社や初詣

岩谷 明子

(冬すみれ)

駅ピアノ置かれしままや春の果て
江の島の人影まばら貝風鈴
ウイルス禍果つ全山の蟬時雨
手のひらに落葉戴く地蔵かな
穏やかに暮るる一日石路の花

江口 文子

(天爲湘南)

手ほどぎに呼ばれてうれしお書初
春寒の猛る病魔や地を巡る
神々し住みなれた地の老桜
新茶買ふ店員の笑み福々し
看板をわがものとして蔦茂る

遠藤 ますみ

(天爲湘南)

桐一葉町屋の土間へぬける風
初売に役者絵かかぐ京市場
余白から始まる襖絵萩の花
校倉に鑑納むる風五月
運針の母美形なり桐の花

大久保 啓子

(たけのこ)

つつがなく一日を終へ新茶汲む

木下闇抜けて球児の声の中

片蔭を犬と分け合ひほとけ道

ひぐらしに夕餉の支度せかされて

「転ばない」つぶやく先に秋あかね

大庭 浩子

(天爲湘南)

森閑と湖東の寺の入り影

春浅しすきとほる骨拾ひけり

春霞慟哭の日も遠くなり

直言のじんと沁みたりソーダ水

月白し空夜ますます究まれり

大庭 葉子

(天爲湘南)

図書館の学生とほし初桜

草餅の貼紙かしくシヤッター街

シユレッターのはく紙ふぶき冴返る

あぢさゐの前をゆきかふ引越屋

霊峰の見つめられつつ年新た

大矢 暁美

(はまべ)

蒼天のカメラは眩し七五三

秋さやか諏訪湖は蒼き山抱く

大輪が滝と流れて花火果つ

紅葉は合わせ鏡の御射鹿池

初空や大山蒼く深々と

大山賢太

(みちくさ・秋桜・翡翠・なぎさ)

溢蚊や悪しき血を吸ひ千鳥足
台風の波波波の相模灘
薄紅葉亀はのんびり甲羅干し
どら猫の顔洗ひをり秋深し
瀧川の落つる水泡に緋鯉跳ね

大山由男

ひな取め下手な鶯雛笑う
梅雨明けて鳥よけ用のCDか
夏近しコダツ片付け独り寒
空仰ぎ雨を待つのか向日葵も
菊チラシなみなみ注いで傘寿かな

岡本泉

(鷹)

花火果つ盥の底に溜まる砂
灼けし地の草手強しや空仰ぐ
望の夜の手探りに鍵使ひけり
打つ波に生まるる風や蕪村の忌
戸を開けて帰る無人の家暑し

萩野樹美

(草樹・サンシャイン)

なきうさぎの声聴覚全開に
コンドルは空に背をむけ秋愁
フラミンゴの声のむこうの冬薔薇
坂続くピラカンサスの実たわわ
松まばらなれど湘南冬初め

笠原 与志生

(湘南若葉会)

穂芒や寂と静もるこ本堂

銀杏ぎんなんの音立て落つる媛ひめの墓

青邨の筆塚囲み残る虫

寸心の苔むす墓やちちろ鳴く

谷深やとき寺の墓域や竹の春

片岡 ふじ子

(はまべ)

おぼんさん仏の前は皆子供

風にゆれ庭をいろどる萩芒

色づけば野鳥がねらう柿蜜柑

秋の夜や削る鉛筆木の香り

響きあり手締めの音の酉の市

加藤 静子

(はこべ・波)

会ふも別るるも縁や月冴ゆる

開封の文に隠し香風信子

葉桜の木洩れ日をんな手より老ゆ

逝きし人みなやさしくて余花の雨

あたたかき木椅子でありぬ句を詠まむ

加藤 英子

(二葦)

願掛けし片目のだるま春を待つ

毎朝の検温課され弥生尽

菜の花やべた風ひかる相模湾

九百年の柏楨そびゆ春の雲

八つ頭掘り出す父や子だくさん

金 栗 トモ子

(サンシャイン)

まだ夢を枯木はきつと見てるだろう

ためらいて言葉にならず白き息

竜宮の使いが春を連れてくる

花は葉に平均寿命迎えます

平成の闇は彼方へ君子蘭

亀 倉 美知子

(波)

古民家の風のひとすぢ吊るし雛

家に籠るふたりの暮らし冷素麵

いわし雲石の窪める塩くれ場

もう跳べぬふるさとの溝赤まんま

山眠る背なをがたんんと一両車

川 口 和 子

(天爲湘南)

江の電に映して走る夕焼かな

丹沢の峰群青に野分あと

子蟻螂星に生まれて草の上

又しても鬼となる子に木の実落つ

草の絮行先告げず風に乗り

河 村 青 灯

(鷹)

あたらしき墓の淡雪はらひけり

さざなみの眩しき中の蜷舟

剛力の帰路は篠の子荷に添へて

ゆふすげや横たふ母の手の力

拗ねる子を措いて農婦の冬菜漬く

河村 美恵子

小林 和子

(鷹)

夏空へ伸びニュートンの林檎の木
遅き子を待ちて瘦せたる毛糸玉
ラガー等の磁石のごとく食らひつく
花カンナ電車ここより海に沿ひ
登山靴脱いで村営露天風呂

舞ふ間にもたぎる湯釜や里神楽
大道芸は動かぬピエロ日脚伸ぶ
炎ゆる日や市場のをんな逞しき
だまし絵の馬は動かず晩夏光
石路咲くや祈りの山へ続く道

草柳 節子

小堀 公美子

(天為湘南)

(鷗沼かぼちゃ)

蜜柑山村が明るくなりにつけり
遠雷や街に灯のつく午後二時
髪切りしと電話の声や風涼し
束にしてコップに挿すや草の花
冬晴や林の中を色帽子

御神火を蕊に灯して島椿
ママレード春ほろ苦く煮つめゆく
島らつきよ琥珀となりぬ壇の底
レモネード揺らす真夏の静寂かな
日輪を宿し古代の蓮ひらく

小松原 キイ子

(一葦)

獅子頭脱ぎし初老の息づかひ
コラムより始むる音読春炬燵
金婚の歩をゆつたりと彼岸寺
目印は天使のはしご枯野ゆく
通るたび手合はす鎮守雪螢

小宮山 はるき

(みずぎ)

濡れ仏そびらに春の光かな
定宿の真中で踊る焼鮑
夕虹や埴輪の囲む大古墳
山霧の解けて万座の白濁湯
萩刈つてなほ「萩寺」の名を残す

小山 美穂

(みちくさ)

昼顔やケッセル思う吾読書
足下にじやれつく小犬花笈
春泥を踏みしめ歩む馬の列
シヨートステイいいも悪いも春隣
コロナ来て大学試験影響す

坂部 ヨミ

(柀)

手を繋ぐ若い二人や春の空
外出もままにならぬや花は葉に
日傘さす距離を保ちて登校す
納まらぬコロナウイルス余花の雨
新型コロナ全面解除梅雨雲

笹川 希伊子

島田 昌子

(たけのこ)

(一葦)

石段の萩搔き分けて薬師堂

寒椿母の遺せし黄八丈

竹林の小径に立てば秋の声

最後まで泣かなかつたよ鬼は外

日記には感謝の二文字大晦日

手水舎に江戸風鈴の数多揺れ

亀甲の帯締め終へて初鏡

川風に心預けて一遍忌

とんとんと七種刻む口ずさむ

ハングライダー富士へ舵切る小春かな

篠田 清秋

鈴木 絹子

(かわせみ)

新蕎麦の種蒔き七日早や双葉

太鼓橋渡りて梅の香りかな

湘南の夏の砂地に蕎麦とれり

郭公や森には森の時間あり

秋の朝蕎麦クッキーを焼く香り

サングラス外せば常の街となり

ウイズコロナ新蕎麦育て腰伸びる

言い訳はしないと決めて林檎剥く

コロナ前ハロウィン休暇今は夢

相づちで続く会話や温め酒

鈴木 千枝子

相州 散人

(天爲湘南)

家中に神ある暮し雁渡る

刈る人の声遠くなる芒原

擦れちがふ赤い手絡の時雨傘

天地の香を帯びつがる新走

蒲公英の絮飛ぶ遠流の海の果

栖原 由美子

(鷹)

亡き人に話し掛けたる寒北斗

底物を狙ふや夫の着ぶくれて

凧や紙漉く人の腕捲り

陀羅助を釣瓶落しのたなごころ

黒塀に囲ふ仕舞屋秋すだれ

墓石は朽ちて読めずもいたちぐさ

草餅の包みは柔く午後のお茶

菜の花や新ランドセルに子は燥ぐ

苗代の整へらるや農繁期

井戸端に束ねられたり蒨稜草

高久 弘行

(天爲湘南)

柚子の皮落し朱の椀誕生日

吊橋の彼方に揺るる谷紅葉

海の無き里に波打つ稲穂かな

寝ころべば空の青さや草の絮

鳴く地虫憂ふ地球の温暖化

武元ひろ子

田原梨絵子

(五月会)

風光る門を動かぬ陶の犬

江ノ島の人待ち顔や夏の果

美しき花束届く秋彼岸

脇道に残る鳥居や渡り鳥

児に習ふかるた遊びや女正月

田中洋子

千葉民子

乾草のほどけ香のたつ二月かな

走り去る二輛列車や青田風

まつさおな風に隠れし青蜥蜴

鬼灯や厨の匂ひもれきたる

泣きじやくる児にも言ひ分柿日和

コスモスの三色の生みし和音かな

佳き出合ひ服にもありし秋セール

さつま芋焼けましたよと祖母の声

大音量の基地ある駅や泡立草

山からの水軟らかし小春かな

こぼれ萩踏みしめのぼるほどけ径

敗戦忌軍国少女たる記憶

芒原見えかくれする人を追ひ

啓蟄や杖をたよりの卒寿にて

祖父を継ぎし応援団長(娘)卒業す

塚越 やす子

常盤 貴美子

(道草)

デバ地下の鯛焼きほつこり桜冷え
近寄れば灯る玄関あたたかし
縁台へ母の手招き夕涼み
さざん花のくれない深め雨上る
くたくたのエプロンはずす梅雨夕焼

春日の光となりて伊豆の海
梵鐘の夕べを告げる遍路道
甲斐駒の紫紺の朝や夏来る
今朝秋やパンの香流る石畳
仲見世に選ぶ土産や小春空

手塚 智之

戸田 恭子

(日航はいく会)

生い茂る雑草の中吾と蕎麦
荒ぶれし心の一隅振れ花
ペタル踏む黄昏時の白木槿
仲秋や月の裏には宇宙人
じつと見てなおいとやと枇杷の花

あざ字の付く昔の地番葛の花
表門かたく閉ざされ桐一葉
潮騒と思ふ耳鳴りそぞろ寒
電話くる声は父似や夕かなかな
芒原数歩で渡る丸木橋

富山 ゆたか

永井 かほる

(波)

島見えぬ日にも島あり梅雨滂沱
月光や水深きより魚跳ねて
秋渚入日の欠片映しをり
秋なれや渚を波の長く引き
千鳥飛ぶ夕くれなゐの渚かな

ほうれん草長けて疎遠となりし村
柏槇の大樹に鶯老いを鳴く
残照をまとひし紫苑切らずおく
初秋や夫と会ふ間の砂時計
鮭打ちの棒のしぶきに日の痩せて

内藤 繁

永塚 享司

(天為湘南)

鍬を振る合間に学び豊の秋
秋灯す明治の英語教科書に
釣糸をしづかに垂らし秋思ふ
宰相の学び舎も消え秋深む
秋風や文字なぞり読む漢文碑

薔薇咲きてステイホームの香りけり
今もなほ咲くや生家の桐の花
七夕の逢瀬今年はオンライン
赤卒の群は川面に日は西に
抜き足でお月見泥棒来るらし

新坂 雅子

西野 洋司

節穴の日矢回転の春埃

焼酎を浴びて渋柿酔ひ候

深梅雨や電子時計の怠け癖

崖に立つ絶景かなと大蜥蜴

病む人の気丈夫にをり小鳥来る

西重 靖人

芳賀 陽子

(天爲湘南)

(サンシャイン)

初産近し花芽ふくらむ川堤

秋声の若き家族の生家かな

秋日和木洩れ日のせて王手飛車

朝ぼらけ空に魚群や椋鳥の群

褒めながら選り好みする木の実かな

空つぼのバスがまた過ぐ春なのに

木香薔薇溢れ咲くまま独居老

日本中今日五月晴金曜日

空耳に呼びたるは誰秋の風

鰯雲らしくなりしが早消ゆる

(つぐみ・終)

思惑の入り組む秋の汽水域

人寄せぬ秋明菊の立ち姿

鰯雲仮想の旅の案内人

色褪せぬ思いあるらし秋桜

雲水のあとを眼で追う実紫

萩原 ふみを

蓮池 高夫

(季)

(はまへ)

筆太の賀状の友と五十年

長生きが増える葉や寒鴉

蛇穴を出て愛されず嫌はれず

鳩が鳴くたんぼの隅に目が二つ

父に似てうつぶせ好きの昼寝の子

大太鼓行け行けどんどん天高く

歩む妻と昭和の歌やこぼれ萩

小春日や心に滲みる箸の音

若き日の夢の覚めしや虎落笛

風呂吹や家内ありてを只感謝

橋本 信一

早田 登

駐車場の尾灯みつめる年の暮

BIG BANGうちゅうも軽きしゃぼんだま

故郷の雪の少なき山仰ぐ

ぶうらんこいでゆらしておもいきり

雨戸みな開け放したる余寒かな

るにいると赤子かさなるしらすぼし

春昼や鳩の群がるバンクズに

なつくさや忘れしことと失せしもの

雨雲の低き暗さや九月尽

どんぐりのでんぐりがへり下り坂

原田 稔

平岡 法子

氷河かな数万年を蔵しいぬ

青芝や踏み出す先に毬ひとつ

水鳥や仰ぐ青空天高し

裏庭や客の目奪う散紅葉

守り札そつと手を添う冬巡礼

原山 テイ子

平山 道博

願いごと一つにしほり初詣

スーパームーン厳戒の街照らしおり

人氣なき庭のふらこ揺れており

校庭に球音戻る葉月かな

日の匂い残りし落葉踏みて行く

(天爲湘南)

泰山木の花見る位置にいたりけり

報せあり泰山木の花見よと

連れだちて泰山木の花仰ぐ

泰山木の花見る今日を締めくくる

泰山木の花の名残りのありにけり

ひと刷毛の真綿の雲や木守柿

海辺から田毎に暮るる能登の秋

大花火川面とよもす信濃川

ファインダー山羊の笑顔と夏帽子

雷雲や阿形畔形の仁王立ち

廣 崎 龍 哉

藤 田 松 邑

(一葦)

筆始夢といふ字の匂ひ立つ

花冷や鋌の錆噴く大手門

打水や路地の奥なる京の宿

竹寺の竹の艶めく竹の秋

日脚伸ぶ摺まり立ちの赤ん坊

福 田 善 吉

(冬すみれ)

泡沫の世をゆるやかに遊行の忌

過不足のなき生活なり古茶喫す

数え日やビルの谷間に薔薇を買う

庭隅の母の涙蓀は残しおく

初秋や葉書ポストへ落つる音

寺の町蝉声せんせい途切れず門開かず

盆踊りなくも笑顔で六地藏

盂蘭盆会帰省止め入る蝉時雨

盆行けず位牌磨きて魂たま迎え

声を出す謡の復活秋に入る

藤 田 真 知 子

(天爲湘南)

能楽堂出づればうつつ夕月夜

冬空へ伸びて曲がりし大櫓

初句会一句の力信じをり

巢籠もりて男子厨房目覚めけり

荷作りを終へし子の顔風光る

保里 よし枝

馬 来 まち子

(サンシャイン)

記帳にはへのへのもへし神の留守
うす紙に包む京菓子初しぐれ
ポケットに詰める青空櫃もみじ
木の実独楽父こだわりの道具箱
言い訳のマスクだんだん重くなる

道たづね同行となり小春の日
手斧始参道を来る木遣り唄
奥の院へさらに石段法師蟬
小鳥来る村に一つの診療所
流れつつ折目ほぐるる紙籬

堀 口 みゆき

見 上 都

(鷹)

(鷹)

言葉なき時間の長し石鹼玉
救急車入りゆく路地の桜かな
海からの奔放な風ダリア咲く
夕立や離ればなれに湯屋の椅子
金魚藻に泡のぼりゆく自由な日

父老いて子が店閉める晩夏光
鷺草や表札しまひ持ち帰る
黒雲に驟雨の壁や車ごし
スカレットオハラの色に曼殊沙華
露の世の植物画集富太郎

宮川敏江

(波)

江の島の木漏れ陽受くる紅椿
初蝶の果敢に子らを追ひ行きぬ
夕さりの寺を窺ひ蝮蛇草
不時着の紙ひこうきやへびいちご
雨上がりはや一条の蜘蛛の糸

宮永武彦

(サンシャイン)

江ノ島や四葩の花も海を向き
片瀬海岸地球の裏より夕焼けぬ
夕暮れの134に秋灯る
春の浜柴は片耳反らしをり
失った心のようにサクラ貝

宮本哲雄

(はまへ)

富士の峰猛暑一転冬化粧
月明り紅葉に見とれ帰路忘る
ブルブルン慌てて探す置炬燵
訪ね来て朝日にはえる冬紅葉
小雨降る傘に飛び散る枯葉かな

森本明美

(はこへ)

葱の花夢の中では美人妻
セブ島に死して帰れぬ終戦忌
籐の椅子本を片手に夢の中
嫁妻母そしてばあさん草の花
散歩する犬に着せたるちゃんちゃんこ

柳生恵子

山田潤子

万葉の句碑巡る旅秋更けり

(天爲湘南)

地芝居の拍手に照れる餓鬼大将

竹取の翁媪となる良夜

断層の波うつ島や秋の声

芒原栗毛駆けたる古戦場

江ノ島は富士への飛び石春の海

(天爲湘南)

花種を蒔く一粒の宇宙かな

山門へ黙の百段薄暑光

初夏の風を捉へてペダル踏む

万緑や神楽鈴鳴る朱の社

山下遊児

山田セツ子

トイレまでの廊下が母の遍路道

(波)

母の手に残る力や啄木忌

衣のごと母は春眠したまへり

ほうたるよ母は黄泉路のどの辺り

露けしや妣が使ひし三面鏡

にぎやかに祖母の講釈かぼちゃ粥

早春の空の色着て君を待つ

子ら来るも帰るもほつと春の空

ミシンがけ今が楽しや小春の日

ゆきひらに煮びたし残し秋夕げ

山田 貴世

ラルビ・ニス・マ・ナイ

(波)

(註)

人日や木椅子のぬくみ分け合うて
方丈の風の高さに白木蓮
雉子鳴くや野山俄に昏れなずむ
古都小路傾け合うてひから傘
軒低く隠れ棲むかに吊忍

山田 敏雄

(天爲湘南)

コロナ禍のマスク美人の姿映ゆ
月見酒沖の漁火見え隠れ
駆ける児の影長くして秋夕焼
無人駅音なく抜ける秋の風
ハロウインの列そこかしこ秋深し

仏 : Restez a la maison cherez chaque jour
Les feuilles d automne et L'hiver
英 : Stay home valuable winter momiji always.
日 : ステイホーム日々大切に冬紅葉(堀口訳)
仏 : Le vend du sud eteignet la flame olympique
英 : The south wind blows out the olympic flame
日 : みなみかぜ五輪の炎消しにけり(堀口訳)
仏 : Le vent caresse les feuilles mortes aux yeux
vers les cieux
英 : Dead leaves blown away into the sky
日 : 空見上ぐ落葉を風が愛撫せり(堀口訳)
仏 : Les grands bamboo a Kamakura en automne
ont un gout de jardin
英 : High bamboo trees Kamakura in autumn season
taste like a garden
日 : 高い竹秋の鎌倉庭の味(ニス・マ・ナイ訳)
仏 : Enfin le bonheur la fleur trouve le fleuriste
英 : The flower has found the florist, That a happiness
日 : やっと見つけた花屋さん花の幸せ(ニス・マ・ナイ訳)

渡辺 正剛

(サンシャイン)

コロナ禍の自堕落浄土なめくじり

まひまひの方向感覚あるやなし

天高し爺があやつるコンバイン

友死して「何で」ひと言秋の声

三笠には錆立つ帆柱秋惜しむ

第一二二回市民俳句春の大会、

第一二三回市民俳句秋の大会は、

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止を

図るため、来場・参加される皆様の安全を考

慮し、中止となりました。

第四十五回一遍上人忌俳句大会

応募メ切 令和二年八月二十日

今年度はコロナ禍につき大会が中止。

応募句のみとなりました。

応募句成績

○遊行寺賞

遊行忌や路傍の石に日の温み

大坪 正美

○青木賞

遊行忌やもの言ふやうに雨が降る

飛田 小馬々

○北澤賞

木漏れ日をはさぬやうに小鳥来る

河本 朋広

○市長賞

表札は昔のままに門火焚く

増井 智子

○協会長賞

遊行忌の風一本に一草に

加藤 いろは

○協会賞

月見草馬の飯屋に灯の入りぬ

小泉 恭子

参禅四日了へし膳なり新豆腐

鏡 みさを

新秋の仏に点す絵蠟燭

朝広 純子

一遍忌どころ研ぐごと米とげり

山田 貴世

かたち無き水の自在や遊行の忌

伊藤 真理子

鯉飛ばや一番星の瞬きへ

高瀬 俊次

恐竜は絵本に戻りぬ虫の夜

尾崎 竹詩

遊行忌の空おしあげて大銀杏

鈴木 三枝子

白石文男

遊行忌や声の籠もりし太柱

亀倉美知子

墓碑銘は宙と一文字小鳥来る

磯貝尚孝

夕べには散るをいとはず夏椿

廣崎龍哉

追はれてはまた押し寄する稲雀

川路ゆさ

迎ふとは生きて在ること益提灯

中村みき子

白秋の歌碑の細字や鱗雲

関波対子

知らぬ子に道譲らるる一遍忌

加野庸子

一遍忌歩きしあとを萩の風

長野保代

ためらわず踊る阿呆となりけり

佐野典比古

逆光の風渴きゐる鴟の贅

第四十六回一遍上人忌俳句大会(予定)

日時 二〇二一年九月一九日(日)

十時〜十六時三十分

場所 時宗総本山遊行寺

講師 高柳克弘氏(鷹 編集長)

主催 藤沢市俳句協会

